somo-somo
sosyo

戦争か、平和か、

小田 実

「9月11日」以後の世界を考える

需要全本请访问 www.ertongbook.com

somo somo sosyo

戦争か、平和か——「九月一一日」以後の世界を考える

二〇〇二年一二月八日第一刷発行
二〇〇三年一月二〇日第二刷発行

［著者］©小田　実

［発行者］中川　定
［発行所］株式会社大月書店
〒113-0033 東京都文京区本郷2-11-9
電話／代表3813-4651　FAX3813-4656
http://www.otsukishoten.co.jp
振替／00130-7-16387
［印刷］精興社
［製本］関山製本
［デザイン］上田宏志＋ゼブラ
定価はカバーに表示してあります
Printed in Japan 2002
ISBN4-272-32022-X C0336

本書の内容の一部あるいは全部を無断で複写複製（コピー）することは法律で認められた場合を除き、著作者および出版社の権利の侵害となりますので、その場合にはあらかじめ小社あて許諾を求めてください。

戦争か、平和か

小田 実
「9月11日」以後の世界を考える

000
F81
398

現代国际关系研究所
-CICIR-
图书馆藏书

RB 2003年7月25日

大月書店

戦争か、平和か

――「九月一一日」以後の世界を考える――

［目次］

需要全本请访问 www.ertongbook.com

はじめに

1——現代の戦争を考える——15
アメリカ合州国という名の「関東軍」／アメリカ合州国＝関東軍に追従、追認／軍隊が中心にある社会／「戦争主義」と「平和主義」／新しい戦争を考える／「一極構造」のなかの「アメリカ民主主義帝国」／「二十世紀」の戦争／「現代の民主主義国家」の軍隊／古代アテナイの直接民主主義＝デモクラティア／「市民国家」の強大な軍隊

2——古代アテナイの「民主主義」——45
ソクラテスの裁判／最終の決定権をもった「市民集会」／民主主義の政治は「ことば」の政治／「ことば」を使うことの目的は「説得」／「市民軍隊」の「市民兵士」の誓い

3——しかし、「軍隊」とは何か——59
「殺し合う集団」としての軍隊／戦争に正義はあるか／「殺す」ことと軍隊

4——民主主義と「平和主義」の車の両輪——71
戦後の私たちの二つの誤解／民主主義と「平和主義」の車の両輪／ベトナム戦争は何んであったか／やるべき戦争、「正義の戦争」はある——パウエルの主張

5——「九月一一日」以後の世界——89
「八月一五日」と九月一一日／奇襲攻撃と「自爆攻撃」／体験としての大阪大空襲／一九四五年八月一四日の大空襲／たいていの戦争は「戦争のための戦争」だ

6——「難死の思想」から——117
ベトナム反戦運動から／「被害者＝加害者」となる

7——生き方の原理としての「平和主義」——130
「世界平和宣言」としての「平和憲法」／「平和主義」を基本とした「平和憲法」／「良心的兵役拒否者」の思想と実践／「平和主義」の実践としての「良心的軍事拒否国家」／「東洋のスイス」としての日本人の夢／「戸じまり」再軍備論の破綻／「核の傘」の抑止力を無邪気に信じる人たち／テロリストに対する「正義の戦争」はある

のか

8——**世界は混迷におち入っている**——167

それは破滅ではないのか／日本の市民が世界に「平和主義」を推し進める／安保ではなく「平和友好条約」を／「良心的軍事拒否国家」としての「平和力」

9——**「良心的軍事拒否国家」に日本の未来を見定める**——191

「阪神・淡路大震災」で見えて来たこと／「軍拡」を抑えて「軍縮」を／市民がつくる「市民の軍縮」計画／「良心的軍事拒否国家」に日本の未来を見定める

10——**「国民」と「市民」**——204

私の「愛国心」、アメリカ合州国との「つきあい」／「市民」とは何か、誰か／「国民」と「市民」／「われら」と「われ＝われ＝われ……」

11——**「殺す」側と「殺される」側**——223

「歴戦の弱者」としての「平和主義者」／「殺してはならない」ではなく「殺され

てはならない」／「する」側ではなく「される」側から考える／国家犯罪がひき起こしたゆがみの歴史／二つの妄念、そして、諸君、自分で考えてくれたまえ

はじめに

今よく論議されているのは、有事法制です。この平和な時代になぜ有事法制というようなものをつくろうとするのかが前提にあって、平和な時代にこそ必要なんだ、という人もいれば。平和な時代に静かな海に波をたてるようなことをなぜするんだ、という人もいる。新聞にもそういう二つの態度が出ている、テレビジョンも同じだ。

私は、その前提がまちがっていると思います。

今の問題は、日本の中だけを見ていては判らないが全世界を見れば、有事の時代が来ている。平和の反対の有事、だから有事立法です。平和な時代ではもうないんだ、という認識を前提として、他の世界を眺めないと、今の事態は判らないと思う。有事というのはおいしいことばで、ほんとうは「戦時」です。「有事立法」じゃない、まさに「戦時立法」です。

有事をつくり出したのは、アメリカ合州国です。これは、歴然としてある事実で、これを忘れてはいけない。ここからすべてが出発します。アメリカ合州国があちこちで有事をつくり出した。一番いい例が、アフガニスタンでの戦争です。

今アフガニスタンではアメリカ合州国の強力な支持の下で、アメリカ合州国の「カイライ政権」と言っても決して過言でない暫定政権ができあがったけれども、アフガニスタンの有事がすんだら、次はイラク。そこでの有事戦争を起こしてイラクを変えるんだということを強力にやろうとしている。

需要全本请访问 www.ertongbook.com

何が起こるかわからない。

それからもうひとつ、今起こっている有事の大きな問題は、パレスチナ。

パレスチナ人の闘争――解放闘争を武力で弾圧する。戦争をする。これが有事です。アメリカの強力なうしろ楯でイスラエルが強力に有事をつくり出している。

現在の事態の引き金を引いたのは、昨年（二〇〇一年）九月一一日の、「同時多発テロ」と今言われているニューヨークの「世界貿易センタービル」への旅客機を奪っての自爆攻撃などの「イスラム過激派」（この言い方が、いまだに正体がよく判らない実行者に対する総称としてもっとも適切だと私は思う）の軍事行動です。しかし、その事態を「報復戦争」の名の下にアフガニスタンに持って行って、大きな戦争に拡大して、世界中に有事をつくり出しているのはアメリカ合州国です。

ほんとうは、あの最初の自爆攻撃の有事を大きな有事に変えなくて収拾できた。しかし、アメリカ合州国はその機会を逃さず、戦争という大きな有事に変えて、拡大した。だから、これはあくまで「アメリカの有事」です。このアメリカ合州国がつくり出した有事に対して、今、世界がオタオタしながらついて行っている。これが今日の世界のさまです。

そのオタオタしながらついて行っているなかの最先鋒が、日本です。日本はその有事になんとかして即応し、対応し、ついて行くために、まず、「周辺事態」に対応する法律をつくった。これは「九月一一日」のまえでしたが、今は、より完全にアメリカについて有事法制をつくり出そうとしている。

では、日本はどうすればよかったのか。私は「九月一一日」の事件のあと二つの文章を書いています。ひとつはあとで引用するまさにその直後に書いた「日本の市民として考える」ですが、もうひと

つは少し日数をおいて書いた次の「『同盟国』日本が今文明から求められていること」と題した次の一文です。

無関係、無防備の市民が乗る旅客機を乗っ取り、無関係、無防備の市民が働く建物に自爆攻撃をかけて旅客機、建物双方の数千人の市民の生命を奪うようなことは、もちろん許しがたい野蛮な犯罪行為だ。行為の主謀者に「法」の裁きを受けさせ、責任をとらせることは、彼らの犯罪の犠牲になった市民を悼み、残された家族などをできるかぎり支援することとともに、今、当事者のアメリカ合州国のみならず、世界全体が助け合ってなすべきことであるにちがいない。ことを少し大きくして言えば、これは今野蛮の攻撃、挑戦を受けた文明が当然なすべきことだ。

しかし、今、この野蛮に対して戦争によって「報復」する——これははたして文明がなすべきことか。文明の名に値する行為であるのか。大いに疑問だ。

世界の文明が未発達、野蛮の時代にあっては、犯罪者の無法、不法に対する唯一の方策は「報復」であったに違いない。「報復」しか無法、不法を糾す術はなかったのだ。殴るなら、殴り返せ。盗めば、盗み返せ。あるいは、盗みを働いた人間の手を切れ。殺せば、殺し返せ。もちろん、殺されれば、被害者はこの世にいない。では、家族、親族、仲間がカタキ打ちで死者になり代わって「報復」をやる。やれ。これはつい百年余の昔まで日本でも論理、倫理にかなった行為として行われて来たことだ。

文明は、こうした「報復」をただの仕返しの「私刑」として否定することから始まる。仕返しの

「私刑」は仕返しの「私刑」を生み、「報復」はおたがいのあいだで無限につづく――その根本認識に立って、文明はこの無限、また個別の連続にとどめをさそうとする。なるほど力によって、一時的には無限連続を押さえ込むことはできる。一方が他方の仕返しを許さないほど強大である場合だが、その一方の強大がいつまでつづくかは判らない。文明はその認識の上に立って、力によってではなく人間の理性に基づいて、理性がかたちづくる「法」を基本とする普遍の場に問題を引き出し、「報復」の無限、個別の連続を断ち切ろうとする。もちろん、その理想が完全に実現することはないだろう。しかし、その理想にむかって努力する――その努力に文明は自らの土台をおく。そこで野蛮と切れる。

私が今度の「事件」に対するブッシュ大統領以下のアメリカ合州国政府の対応にかかわっておどろくのは、そして、深く憂慮するのは、彼らが何ごとにつけ「報復」の論理、倫理を居丈高にふりかざして来たことだ。その究極が「報復戦争」だが、彼らの言辞を聞いていると、まるで中世、いやもっと昔、文明以前の野蛮の時代に立ち戻った気さえする。近代の戦争にあって、これほどあからさまに正々堂々と「報復」を戦争の理由づけに押し出した戦争はないにちがいない。日本の「日中戦争」は「東洋平和」のための戦争、アメリカの「ベトナム戦争」は「自由と民主主義」のための戦争だった。どちらもがマヤカシだったが、すくなくとも二つは「理想」をかかげての戦争だった。しかし、アメリカが今行おうとしているのは、ただの「報復戦争」――これはアメリカにとってだけでなく世界全体にとっても前代未聞の事態だ。

もちろん、この戦争によって「事件」の首謀者たちを捕らえ、「法」の裁きに服させると、大統

領以下は主張している。しかし、「報復」を前提とする裁きは、ただの「報復裁判」ではあっても文明がその前提とする公正な裁きではない。結果は予想がつく。その裁判の根拠となる主謀の証拠にはそもそもいかなるものがあるのか。この国際的犯罪をいかなる「法」的根拠に基づいて裁こうとするのか。ことは何も国際的には決まっていない。決まっているのは、アメリカが強引に「報復」のための戦争をする、そこに世界をひきずり込もうとしている――ただ、それだけだ。

アメリカとのつきあいの長い（四十三年前の留学以来だ）、友人知己も多い私には、これまでの歴史で「外敵」からの直接攻撃を受けたことがなかったアメリカは、今冷静さを失って一種のパニック状態、あえて言えば「狂気」のなかにあるようにさえ見える。疑わしい国には攻撃をかけると言い、この戦争に全面的に協力するか否かでこれまでの「同盟国」が真の「同盟国」かどうかが決まるとおどしをかける。これでは「同盟国」はアメリカの「属国」になれ、なるかどうかで「同盟国」であるかどうかがきまる、いや、そうアメリカが決める――と言っているのと同じだ。

今度の「事件」ではじめて逆境に立ったアメリカを、「同盟国」か否かにかかわらず世界を助けるべきだ。しかし、アメリカの「属国」になって「報復戦争」の「狂気」に加わるのではなく、自らの原理と方法に基づいて助ける――それがアメリカの「同盟国」日本が今文明から求められていることだ。

（『毎日新聞』二〇〇一年九月一八日）

しかし、日本はこの「『同盟国』日本が今文明から求めていること」をしませんでした。代りに、

ただ、今や「文明」に反する戦争を無限定に行なおうとするアメリカ合州国にただ追随し、今、一層協力、追随するための法制度の整備を今アメリカに強請されて行なおうとしている。これが「有事立法」という名の一連の法律づくりです。だから、政府の答弁の論調が支離滅裂なのです。何が有事であるかということも説明できていないのだからひどいものだ。しかし、それでもやみくもにも「有事法制」は実現されなければならない。これができれば、日本は完全にアメリカの「属国」になります。

ヨーロッパ諸国は異論があってなかなか「属国」になろうとしない。アメリカの一番忠実な部下が、戦後の歴史のなかでまちがいなく日本だったのですが、「九月一一日」以後、日本ではさらに完全にアメリカにつき従い、支える体制ができあがりつつある。「有事法制」が完全にできあがれば、アメリカはそれに乗っかって、いくらでも有事の拡大ができる。その認識をまず私たちはもつべきです。

1 現代の戦争を考える

【アメリカ合州国という名の「関東軍」】

私がここで思い出すのは、かつて日本には「関東軍」というものがあったことです。日本帝国陸軍の一部としてあった軍隊ですが、これがどれだけ日本を破滅に導く大きな役割を果たしたかということを、私はここであらためて想起します。

「関東軍」は、中国東北部――当時の呼び方で言えば「満州」に駐在していた日本の軍隊です。日本は歴史的に、日清戦争によって、朝鮮での支配権を確立する第一歩を踏み出したあと、日露戦争によって、朝鮮の植民地化を達成します。

その上でさらに中国の東北地方の支配に乗り出す。

まだ中国東北地方の領土全体を支配していないのだけれども、日露戦争の勝利で権益のひとつとして、南満州鉄道、よく満鉄という言葉でいわれる鉄道がありますが、それを獲得する。また、同時に、旅順、大連を租借地として手に入れる。それらの権益を護る軍隊として、日本帝国陸軍は、軍隊を派遣することができた。しかし、これは東北地方全体を支配する軍隊ではなかった。そういう一定の地域

需要全本请访问 www.ertongbook.com